

# 羽倉弘之氏との思い出

立命館大学総合心理学部 北岡明佳

羽倉弘之氏（以下、羽倉さん）との最初の出会いの正確な日付や場所は思い出せないが、もう 20 年近く前の電気通信大学（東京都調布市）だったと思う。当時私は東京都府中市にある神経科学の研究所（財団法人東京都神経科学総合研究所）に研究助手として勤務していた。私は心理学の大学院出身なので、神経生理学の研究の助手をやりつつも、心理学的なテーマに興味があった。その研究所で錯視の研究を独自に始め、研究所からはいわば黙認状態で活動していたのであるが、当時私に親しく接してくれた他研究機関は、東京都立大学（現・首都大学東京）、東北大学、そして電気通信大学であった。

電気通信大学では、両眼立体視の錯視研究を得意とする出澤正徳先生の研究室にお邪魔していた。お邪魔したと言っても、研究室の定例の発表会にお呼ばれして、その院生達・学生達とともに研究発表をする機会を頂いていたことを指す。そこが羽倉さんとの出会いの場となった。出澤先生と羽倉さんのつながりを私は詮索したことがないからよくわからないのだが、羽倉さんは 3D のファンであり、錯視のファンでもあったから、その積集合である出澤先生の研究室への出入りは自然な流れだったのであろう。

羽倉さんは最初から私のことを高く評価してくれていた。今はインターネットで私の研究業績と錯視の作品を一覧できるから、私の評価を定めることは容易かもしれないが、当時研究所の助手にすぎない私のことを評価してくれたのは少数の人であった。その中でも羽倉さんは異色で、私の研究をよくわかっていないように見えるのに、ゆるぎない信頼を下さった。いや、お亡くなりになるまで、錯視研究のことは結局よくわかっていらっしやらなかったような気はする。しかし、私にとっては羽倉さんは私が苦しかった時代に光を当ててくれた恩人の一人なので、全然問題ではない。

羽倉さんは私に「錯視大辞典を作ろう」と何度も明るく誘ってくれた。そのたびに、私は曖昧な態度で辞退し続けた。錯視研究は 20 世紀末から急伸の時代に突入していて、まとめるというのは時期尚早だと思われたし、羽倉さん自身には錯視研究者の人脈はなかったようで、私の知り合いを集めただけでは十分な執筆陣を形成できそうもなかったからであった（今でも無理である）。

羽倉さんが創設(?)した三次元映像のフォーラムの機関誌の表紙には私の作品を何度も飾らせて頂いた(図 1)。また、内側にも毎号異なる作品を飾らせて頂いた。作品の中には、ただの錯視であって 3D とは言い難いものも含まれていたと思うが、そこは羽倉さんで、快く寛容して下さった。

羽倉さんには、錯視コンテストの審査委員になって頂いた。錯視コンテストは 2009 年が第 1 回で、羽倉さんは創立時からのメンバーである。ユニークなキャリアを背景とした羽倉さんによる審査であるが、他の審査員からのものと大いに異なることはなかったと思う。あまり独自色は出さないように自制されていたのかもしれない。2015 年度の第 7 回錯視コンテストが、羽倉さんが応募作品を審査した最後の回となった。第 8 回の 2016 年度は審査委員ではあったが、既に連絡を取れないほど体調が悪かったのであろう、審査会には間接的にもご参加頂けなかった。そして、錯視コンテストの授賞式の数日後に私は羽倉さんの訃報に接したのである。

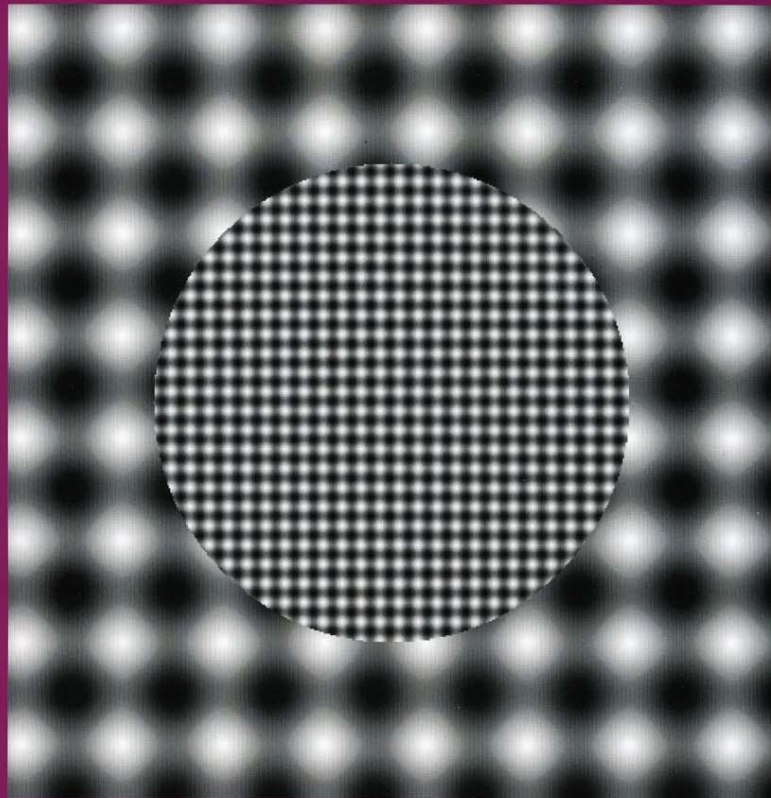
私の新しい研究室には「羽倉文庫」がある(図 2)。羽倉さんから頂いた錯視の文献だ。見たこともない古いものもある。錯視本はすぐ絶版になるから、「錯視図書館」でもできようものなら貴重本の山かもしれない。いずれ十分整理して、天国の羽倉さんに報告したい。

平成 8 年 1 月 16 日 学術刊行物認可 ISSN 1342-2189

Vol.20 No.1 2006・3

*The Journal of  
Three Dimensional Images*

3D 映像



三次元映像のフォーラム

THE FORUM FOR ADVANCEMENT OF THREE  
DIMENSIONAL IMAGE TECHNOLOGY AND ARTS

図 1 3D 映像誌の表紙の例。このプラッドパターンが動いて見える錯視デザインは私の作品である。



図2 「羽倉文庫」。立命館大学大阪いばらきキャンパスの私の教員研究室にある。